中山道を歩くーその６(赤羽、王子)

いよいよ東京に入ってきた。東京は知り尽くした都会なので、もう迷子になることはない。
なにしろ５０年間近くも、東京という大都会の変遷を見ているし、目印になる大きな建造物はあるし、夜になっても高層ビルや東京タワーには明かりが点るし、方向はよくわかる。
むしろ住んでいる田舎の方がわからない。天気のよい日中であれば、県庁舎や市庁舎などのそれなりに高い建物や、遠くにそびえる山の形で判断できるが、夜になるともうお手上げだ。山は闇に包まれ、高層のイルミネーションもない。ずっと以前、東京の新橋駅近くで仲間三人と夜遅くまで飲んでいた。そろそろ終電車なので帰るといったら、その内の一人が車で来ていて、群馬まで送ってゆくと言う。丁重にお断りしたのだが「なーに、関越道路でひとっ走りさ」ということで深夜に近くのインターで下りたのだが、さっぱり自宅方面がわからない。「なぜ、地元なのにわからない」と怒られたり、自宅の飼い犬には「怪しいヤツ！」と吠えられたり、さんざんだったが、友人たちはぶつぶつ言いながら、明け方、又、東京方面に帰っていった。ご苦労なこった。

埼玉県と東京都の間には「荒川」が流れていて、朝の通勤客はこの鉄橋を渡るとき、ゴトゴトという振動で座席の眠りから覚める。
写真の向こうに見えるのがその高崎線の鉄橋で、今はこちら側の「新荒川大橋(岩槻街道)」を歩いて、東京都に入ってゆく。
赤羽（あかばね）は東京都北区にある交通の要駅であるが、都心から見ると、その名のとおり北に位置するので「埼玉県か？」などと間違えられ、赤羽在住民を口惜しがらせている。

赤羽から王子を抜けるところに「飛鳥山公園」がある。
この公園は、徳川吉宗が享保の改革の一環として整備・造成を行ったもので、当時、江戸近辺の桜の名所は上野の寛永寺程度しかなく、花見の時は混雑し風紀が乱れた。このため、庶民が安心して花見ができる場所として造られたのがここで、春は桜、梅雨時はアジサイが素晴らしい。

王子から駒込に抜ける辺りに一里塚(いちりづか)がある。
一里塚とは、大きな道路の側に１里毎に旅人の目印として設置した塚（土盛り）である。元々は中国起源のものだが、日本では、平安時代末期に、奥州藤原氏が白河の関から陸奥湾までの道に、里程標を立てたのが最初と言われている。
一里塚が全国的に整備されるようになったのは江戸時代である。
江戸幕府は日本橋を起点として全国の街道に一里塚を設置するよう指令を出し 10 年ほどで完了した。
目印に榎などの木が植えられ、木陰で旅人が休息を取れるように配慮されている。

私は一時この付近に部屋を借りて住んでいた。丁度、合気道を始めた頃で、深川の道場で汗を流し、体はクタクタではあったが心は充実感にあふれていた。稽古後に道場仲間たちと「座学」と称する合気道理論を飲み屋で論じ合い、冷たいビールを喉元に流し込む時が至福の一時であった。